

〔報告〕

伝道できる説教を目指して

瀬谷 寛

1 自己紹介として

わたしは今年の4月に、仙台東一番丁教会に仕えるために遣わされて来たばかりである。これまで、教会に仕える牧師として、伝道させていただいてきた。しかし、伝道の実績をもってやってきたわけではない。在任中、何人かは受洗者が与えられたが、次々と与えられたわけではない。ここに伝道の成功例があり、この通りにすれば、伝道できるようになります、という話をするわけではない。わたしにはそれは出来ない。

伝道の困難に直面しながら、どうすればよいか、うめくように模索しながら、何とか伝道したい、伝道できる説教ができるようになりたい、と願い、学んでいる者にすぎない。

2 現状認識

伝道の停滞が叫ばれている。事実、各教会において受洗者が与えられない。伝道の難しい時代、と言われる。先日、ある、隠退教師を訪ねたが、伝道における、時代の困難さは、確かにある、とおっしゃっていた。ご自身の50年近くに渡る牧師としての生活の中で、最近の若い伝道者の怠慢を指摘するのとおもいきや、キリストの福音を受け入れない時代の影響を認められるのか、と意外に思った。困難さを、共感してくださった。少し、嬉しく、ありがたく、それだけに厳しい思いを持った。わたしたちは、そういうところで戦っている、戦わなければならないのだ、と。

3 問題意識

そのような中で、伝道の困難さと戦わなければならない。その、戦いに、いろいろな武器が考えられるかもしれないが、何よりもの武器、その要は説教であると確信する。わた

私たちは、教会の牧師・伝道者としてどのような説教をし、またどのような説教を目指しているだろうか。わたしにとっての差当りの答えは、その説教によって伝道をし、教会が建て上げられる、そのような説教を目指す、というものである。どのような説教をすれば、この難しい時代、世界の中で、イエス・キリストの福音を伝道をし、イエス・キリストの教会をつくり上げることができるのか。

この問いに、わたしたちがどう答えるのか。改めて問い直したい。

4 説教とは、十字架のキリストを描いた聖書を神の言葉として語ること

そもそも、説教とは何か。何を語るのか。大前提として、説教は、説教者の思想や、考えを述べるものではない。あくまでも聖書を語る。わたしたちはここを出発点とする。

そのうえで、では聖書を語る、とはどういうことか。聖書には、何が書いてあるのか。そのことを正しく捕らえなければならない。

一コリント 2: 1～2「兄弟たち、わたしもそちらに行ったとき、神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。」

一コリント 15: 3～5「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。」

パウロは、はっきりと、自分が宣教（伝道）する時に、十字架のキリストだけを語り、それ以外を語らない、と言った。そこに集中する。しかも、それは、パウロの独創、というようなものではない。自分も受け継いだ言葉として語る。しかも、「聖書に書いてあるとおり」。まさに、「聖書に書いてある」こととは、キリストが十字架と復活を成し遂げ、その後、現れてくださった、ということである。それを神の言葉として語る。その言葉が結集したのが、信仰告白である。この、十字架のキリストこそ、時代がどのようなであっても、変わることもない、神の言葉としての聖書の内容であり、説教の内容である、と考え

る。

5 伝道する、ということは何が起こることか。

説教において、この十字架と復活のイエス・キリストを宣べ伝えと、どういうことが起こるのか。

一コリント 14: 24, 25「皆が預言しているところへ、信者でない人か、教会に来て間もない人が入って来たら、彼は皆から非を悟らされ、皆から罪を指摘され、心の内に隠していたことが明るみに出され、結局、ひれ伏して神を礼拝し、『まことに、神はあなたがたの内におられます』と皆の前で言い表すことになるでしょう。」

ここでの預言とは、説教と考えてよいだろう。その言葉を聴いた者が、そこで語られている言葉を理解し、悔い改めて、「まことに神はあなたがたの内におられます」と告白することが起こる、というのである。正しく説教されていたら、そのことは必ず起こる、その約束の言葉であると信じる。

このことは、強調して、強調し過ぎることはない。このことを、まず確認したい。

6 では、どうしたら、伝道できるのか

そこで問題は、どうしたら、この時代にあって、十字架のイエス・キリストを語り、悔い改めて「まことに神は、あなたがたの内におられます」と告白する者を呼び起こすことができるか、ということになる。

(1) 今、ここで、あなたに向かっている聖書の言葉

いかに聖書を読むか、そしていかに語るか、が問われるのではないか。

聖書の言葉は、2000 年という時間とパレスティナという空間を隔てた言葉かもしれない。しかしながら、聖書の言葉は、その距離を埋めて、今のわたしたちに語りかける神の言葉として読まれるべきである。

そのメッセージの中心は確かにいつの時代の、だれがそこにいても同じかもしれない。けれども、「十字架と復活のイエス・キリスト」という原理を語ればそれでいい、というのではない。ここで、十字架のキリストを語る、とはいかなることか、ということが問わ

れる。十字架のキリストを語るということは、十字架のイエス・キリストによって打たれ、決定的に変えられる出来事が引き起されるように語ることである。それは、わたしたちに現れ、わたしたちの内におられる豊かなキリストのお姿を描き出すことである。

説教とは、今、ここで、あなたに対して、主イエスの十字架と復活の出来事が起こっていることを、告げることである。それは実に、個別的で、具体的な出来事である。今ここで、説教を聞いている人々のため、わたしたちのための言葉になっているかが問われる。聞かれても、素通りされてしまつては困るのである。あえてきつく言えば、自分に向けられた言葉として聞かれず、自分とは無関係な言葉だ、と受け止められてしまったならば、その説教は失敗なのである。

(2) 分かる説教

聞き手が、語られている説教が自分のことである、とを感じるためには、説教を理解をしなければならない。本当にそのことがわかると、半分居眠りしていた人も、目を覚まさせるを得なくなる。

もちろんその背後に、霊の導きをひたすらに祈り求める、ということが前提となる。霊の働きがなければ、「イエスは（このわたしの）主である」と理解し、告白することは引き起こされない。

しかし、改めて単純素朴に、聞き手に自分の言葉が届いているか—理解されているか—分かるか、ということに説教者はもっと関心を注ぐべきであると思う。特に、求道者、その日、初めて教会の礼拝に参加し、説教を聞いている人が理解できる言葉を語っているだろうか。言葉が届いて、そこに出来事が生じる。そこでしっかりと心に受け止められて、聞く者の生活が変えられることになる。わたしたちは聞き手の世界に通じる言葉、聞き手の生活に根ざし、その思考に馴染んだ言葉を、意図、役割、効果を吟味したうえで用いる努力、挑戦をすべきではないだろうか。

(3) 聞き手を愛する

そうなると、聖書のみ言葉に耳を傾けることとともに、聞き手に耳を傾ける黙想が、どうしても必要になる。聞き手にしっかりと眼差しを注ぐ。それは、説教者・伝道者として、聞き手に愛を注ぐことでもある。結局は、聞き手を愛しているか、が問われる。愛するが故に、この言葉を、この事柄を、どうしてもあの人に届けたい、と願う。そのために言葉の吟味が始まる。主イエスが教えてくださった律法、「神を愛し、（自分を愛するように）隣人を愛する」作業を、何よりも、説教者は、説教を作ることに於いて、求められている。

(4) 説教者が、謙遜に学び続ける

そのような言葉を獲得するためには、説教者は常に学び続けなければならない。先週まで、夏期伝道実習の神学生を受け入れたが、説教の初心者、と呼べる人はもちろん、学びをしなければならない。しかし、経験を積み重ねた伝道者、説教者も、常に、自分の言葉が届いているか、適切であるか、学び続けなければならない。学ぶことをやめた説教者は、伝道することをやめている、とさえ言えると思う。その学びに必要なことは、謙遜であり、他人の批評を受け入れる、心の柔らかさと強さである。ぜひ、ご一緒に学び続けさせていたいただきたい。

7 まとめ ― 伝道できる説教を目指すために

(1) イエス・キリストの十字架の赦しの出来事が今ここで出来事として起こっていることが、はっきりとわかるような、明確なメッセージの獲得しよう（神の名による言葉の獲得）。

(2) それを生活の言葉、聞き手の言葉で語ることによって、聞き手の心に届けよう（聞き手の言葉の獲得）。世界の言葉、生活の言葉、思い切って語る勇気を持とう。

○ おわりに

説教で、伝道できることを信じたい。説教以外のことが、伝道に資することがまれにあることも認める。しかし、説教が変われば、ほかのことも変わる。一人、一人の心に届く配慮の溢れる言葉が語られると、その説教が聞かれている場が、愛の共同体、慰めの共同体の場となる。そこで、「まことに、神はあなたがたの内におられます」と告白せざるをえないような求道者が与えられる。そう信じて、説教の研鑽に励み続けたい。

※付録

説教題について

日本のプロテスタント教会には、最初期は、説教題がつけられていなかったようである。説教は礼拝の一部であり、題がなければ礼拝が成り立たない、というわけではない。

けれども、せっかく説教に題をつけられるのであれば、それを伝道に生かすことを考えても良いのではないか。

大抵の場合、説教題をつけるのは、説教をする一週間以上前で、まだ説教の形も見えていないから、ということで、大まかな、当り障りのない題をつける、というのはよくあることである。

仙台東一番丁教会は、東北大学の北門の前にある。随分多くの人たちが、その前を通る。大学の関係者ばかりではない。ご近所の方々も多くいる。毎週、奉仕者が説教題を美しい字で書いてくださり、掲示される。その前を通る人達の心に届くような、訴えかけるような、背中を押すような、メッセージ性のある説教題を付けたい、と考えている。今、ここを通る、あなたに向けて語る説教の先取り、小さな説教として。それがさしあたり、すぐに始められる伝道ではないか、と思う。